

---

# 学縁者

シャナ丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学縁者

### 【Nコード】

N4470J

### 【作者名】

シャナ丸

### 【あらすじ】

学園物を書く予定です！

毎回1話か2話完結で物語を進行していく予定です。

## はじまり

僕の名前は古太郎。

読み方はイニシエ タロウ。

小さいころは皆にコタロウって言われていた。

決してこのあだ名でいじめられていたわけではない。まあこの名前が好きかって聞かれてたら好きではないけどな……

僕の名前のことはさておき、今日から僕は学校の先生になるのだ。そして今日の前にあるのが僕が今日から勤務することになっている縁高等学校だ。この学校は結構古くて歴史ある名門校だ。先に言うておくが僕は金八先生に憧れて先生になったとかじゃないぞ。

さて今日から僕の教師生活が始まるわけだが……

校門を通り職員室に向かっていると若い女の先生が僕の肩を笑顔で叩いた。

この先生は佐藤ゆかり先生。何で僕がこの先生のことを知ってるかって？それはこの先生とは幼なじみだからだよ。

「コタロウも今日から先生なんだよねえ」

「自分でも先生って呼ばれることになれないんだよ」

ゆかりはわかるわかるとうなずいた。

「確かに私も最初はそんな感じだったけど1年ぐらいで慣れるよ」

「そうか。そっぴいや僕職員室の場所わからないから案内してくれよ」

こうして僕たちは職員室に向かった。

職員室に着くと校長先生が出迎えてくれた。校長先生はあんまり校長って感じのしないさえない人だ。

でもこの校長実はかなりのやり手らしい。この校長が就任してから成績も上がり学校全体の風紀もよくなってきたようだ。どこでどんな手を使ってるかは知らないが、ゆかりの話聞く限りこの人を敵に回してはいけないようだ。

「古先生そんな所につつたつてないで挨拶挨拶」

僕は校長にすいませんと一礼して他の先生方の方を向いて自己紹介をした。

「今日からこの学校で国語を担当させていただく古太郎です。今後よろしくお願いします」

そして皆社交事例の拍手をしてくれた。

そして始業式での新任教師の挨拶も終わり、職員室に戻った。すると校長が近づいてきて出席簿を渡してきた。

「古先生には2年生を担当してもらいます」

「え？僕まだ今日この学校にきたばかりですよ！？」

校長は少し笑うと僕にこう言った。

「きたばかりだからこそ担任を持つんですよ」

そして僕はしぶしぶ自分の担当のクラスに向かったのだった。

## はじまり（後書き）

2回目の小説投稿です。

頑張って続けたいので皆様のアドバイス、評価を待っています！

## 担任

僕は教室に行くまでいろんな事を考えた。

多分荒れているクラスで問題児ばかり集めたクラスなのだろうか？

「はあ〜厄介事押し付けられたなあ」と嘆息しているともう教室に着いてしまっ

た。

僕は腹を括り教室のドアを開ける。

教室の中にいた生徒は皆自分の席について朝の読書を始めている。

何だこいつら、真面目じゃねえか！

僕はホツとして出席をとりはじめる。

自己紹介は朝の読書が終わってからだ！

朝の読書はこの学校の伝統で、なんでも読書をする事で国語力を高めようということらしい。

うことらしい。

この神聖な時間を自己紹介なんてもので潰すのも悪いしな……

……

そんなことを考えているともう朝の読書は終わってしまった。

皆が本を片付けている間に僕は黒板に名前を書く。

なんだか名前を書くのは嫌だ。

なんでかって？

それはこの名前をあまり気に入ってないからな。

そして名前を書き終えたら深呼吸して僕は自己紹介を始めた。

「僕の名前は古太郎です」

生徒は黙って聞いている。

「昔はコタロウって呼ばれてました。まだ先生になったばかりの新米だからお手柔らかに以上！」  
ノリアクシヨンだった……..  
とても気まづい。

この沈黙の後、一人一人自己紹介を済ませて僕は1限目の授業があるクラスに向かった。

それにしても僕のクラス全員静かすぎないか？

そんな疑問を残しながら僕は人生初の授業を始めていった。

ここでも同じように自己紹介をしたが皆笑ったり、彼女はいるのか？とか定番の質問をしてきた。

そして初めての授業は終わりとりあえず職員室に戻った。

職員室には校長先生が僕の席に座って待っていた。

何か怒られるのだろうか？

職員室に入るなり校長先生に呼ばれた。

「古先生こっちこっち」

手招きをしている校長先生は死神に見えた。

なんでかって？

だってこれから怒られるのだろうか……..

校長先生は溜息をつきながら話を始めた。

「古先生のクラスの子供たちって少し静かな子供が多かったでしょ？」

なんだクラスのことか。

少し安心して僕は校長先生に自分のクラスのことを相談した。

「なんだか皆暗いというかあまり笑わない子供が多かったですね」

「最初に古先生に謝らなければいけません」

僕は頭に？を浮かべて校長に「何の事ですか？」と聞いた。

そうすると校長は暗い表情で僕にクラスのことを教えてくれた。

「あのクラス実は去年保健室登校だったり引きこもりだった生徒を集めて作ったクラスなんですよ」

「え〜！」

僕はものすごく驚いたけど確かにそれなら辻褄が合う。

「あのクラスを先生に任せたのにも理由があるんですよ。前にゆかり先生に聞いたよ、古先生は人を励ますのがものすごくうまいってゆかり先生何言ってるんですかあ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

確かに昔ゆかり先生を励ましたことがあったけどあの時は失恋したゆかり先生にテレビドラマの受け売りでいい言葉を言っただけなのに………

「それはちがいま………」

僕が説明しようと思った校長が割って入ってきた。

「そんな古先生に期待してるんですからね」

正直そんな期待されても困る。とりあえず適当に返事しとくか………

「まあできる範囲で頑張ってみます」

「お願いしますよ」

そして校長は霧のように消えていった。



## 担任（後書き）

今回の話は少し長めです。

他の小説と比べたら短いでしょうが………  
更新不定期なので気長に見て下さい。

## 2 限目

校長に期待されてるんだから少しは頑張らなくては……  
そう思いながら僕は2限目の授業に向かう。

2限目は自分のクラスだ。

ちなみに僕の担当教科は国語だから生徒受けはよくない。

最近の子供は国語のって科目が好きじゃないらしい。

さっきの授業でも生徒に「国語だりいよお〜」って言われたばかりだった。

自分のせいではないとわかっけていても少し落ち込む。

いろんな事を考えているうちに教室についてしまった。

僕はドアの前で深呼吸をしてから教室のドアを開けた。

「よお皆授業始めるぞお〜」

沈黙……………

まあ去年まで保健室登校だった奴らだし仕方ないか。

そう自分に言いきかせて僕は出席を取る。

出席の時は皆ちゃんど返事をしてくれるのに。

最初の授業だし定番の先生への質問コーナーでもやるか！

「みんな最初の授業だしみんなを知る前にまず先生のことを知ってもらいたいな」

「みんな僕に何か質問ない？好きな人いるの？とかでもいいぞ」

そしてこの沈黙……………

少しこの沈黙も慣れてき。

しかし、この沈黙は破られた。

一番後ろの席の八宮啓太が小さな声で僕に質問してきたからである。

「先生神様って本当にいるんですか？」

「え？・・・」

僕はどうかたえていかわからなかった。

とりあえずここは適当に誤魔化そう。

「神様がいるかは先生にはわからないなあ〜あははは・・・」

「

すると八宮は僕を冷たい目でみてこう言った。

「先生・・・誤魔化さないでよ」

「別に誤魔化してないぞおお・・・」

僕は焦っていた。パニックだった。頭の中が真っ白だった。

「今僕の質問を適当に誤魔化そうとしたんでしょ？」

なんでこいつ僕の考えてることわかるんだあああ〜〜〜

「もう一度聞くとよ。この世の中に神様は本当にいるんですか？」

もう僕は正直に自分の意見を言うしかなかった。

「多分いません」

「・・・」

「だって神様がいてるなら世の中はこんなに悪くはならないはずだから」

すると八宮はフツツと少し笑って静かに席に座った。

この時僕は八宮が笑った意味がわからなかったけどこの時八宮が笑ったのは嬉しかったからなのかもしれない。

## 2 限目（後書き）

第3話終わりました。

この小説まったくの素人の僕が書かせていただいているのですが、ものすごく下手ですねハイ。

すいません読みにくくて。

しかも不定期ですいません。

読者はものすごく少ないでしょうが少しでも面白くなるように書くので見てやってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4470j/>

---

学縁者

2010年10月15日21時28分発行